限界集落化が危惧される地域の振興を支援する方策の検討

―群馬県南牧村を事例に―

Examination of how to Support Promotion of the Marginal Communities; A Case Study of Nanmoku Village in Gunma Prefecture

○遠藤和子　唐崎卓也　安中誠司　石田憲治
ENDO Kazuko　KARASAKI Takuya　YASUNAKA Seiji　ISHIDA Kenji

１．はじめに

近年、過疎化、高齢化の進展による集落の消滅が限界集落化問題として提示され、該当する地域の振興支援が緊急の課題となっている。そうした中、複数の集落がネットワークを形成し手を携えながら地域の自治力を高め地域振興を達成していこうとする取り組みが先行県で試行され[1]、2008 年度には集落支援員制度(総務省)や田舎で働き隊(農水省)といった事業が展開されるようになった。さらに、総務省が発表した「地域力創造プラン(鳩山プラン)」関連では「地域おこし協力隊」を推進するための財政措置が現在検討中であり、地域の夢やビジョンを描く振興計画を作ることができれば支援のメニューは揃いつつある、という状況になってきたといえる。こうした政策の流れを「補助金」から「補助人」への転換と指摘する声もある。つまり、当該地域の振興支援を考える場合、計画作りを応援する人、あるいは計画作りのノウハウの拡充が今後大きな柱になっていくと考える。

そこで、本報告では、これまで地域づくりのためにノウハウを蓄積してきたワークショップ(以後、WS)手法が、限界集落化が危惧される地域の振興計画づくりにおいてどのように適用できるのかを、実際の適用事例に即して検討する。事例地域としたのは、65 歳以上人口率が全国第一位となっている群馬県南牧村である。

２．事例地域の概要

３つの旧村が合併した昭和 30 年当時の南牧村は人口およそ 10,600 人であったが、筆者らが最初に村に入った平成 16 年 11 月において 3,020 人、現在では 2,900 人台にまで人口は減少している。村には美しい自然（山河、花など）と文化（武田信玄ゆかりの祭り）が存在するが、こんにゃく栽培が衰退して以降、村の産業は一気に落ち込み活力も失われてきた。近隣町村との合併協議に乗ることができず、平成 16 年 8 月に村の高齢化率は全国第一位（51%を超える）となった。JA 甘楽富岡管内に位置するが、平成 15 年 3 月まで旧村単位にあった JA 支所は一部の金融部門を残しすべて撤退し、同時に JA 甘楽富岡のインショップも閉鎖された。村内の農業生産の取り組みとしては、唯一、花卉生産組合が売り上げを伸ばし、県の普及指導が熱心に取り組まれ定年帰農者４名が組合に加わっている。花卉生産、I ターンなどの明るい話題もないわけではないが、南牧村は全国的に見ても過疎化、高齢化の進行が著しい地域である。

３．振興支援としての WS の実施

南牧村を対象とする WS は、筆者らが中心的に企画を担い、村や県および関係機関のほ

か、当村の振興支援を応援してきたボランティア組織のメンバー(大学教員など)がスタッフとして参画し運営を支えている。

最初の試みは、2008 年 3 月に実施した「南牧活性化ワークショップ」である。この企画には村内住民 30 名（男性 24 名、女性 6 名、年齢 32 歳～76 歳）が参加し、4 つの課題(農産物加工、炭を活かす、空家・農村移住、南牧お宝発掘)について 4 班に分かれて話し合いを行った。それぞれの班で活発な話合いが持たれ、成果を持ち寄った発表では、村を活性化させるためのアイディアについて共通の認識を深めることができた。住民の中からは「次は○○について話し合ってみたい」という積極的な感想が聞かれた。

後日、お宝発掘班で出されたアイディア「滝マップづくり」を実現するために、県の事業を活用して別の WS が村主導で立ち上がっている。滝マップづくり WS は、村の自発的な試みとして開催され、住民らが数回の WS に参加し話し合いを重ね、写真やエピソードの収集を行い、滝マップを完成させていくというものであった。このような展開は、WS の経験を通し、村の将来を語り合うこと、語り合える仲間との場を持つことの楽しみを住民や村が享受し得たことが原動力の一つになったのではないかと考えられた。

続いて、2009 年 3 月には村内でも高齢化の著しい星尾地区を対象とする点検 WS を開催した。この取り組みは、地区にある 4 つの集落ごとに班を編成し現地踏査、写真収集、地図の作成、発表という流れで実施された。いずれの班からも予想を上回る地域資源が報告され、参加した 17 人の地区住民全員が発表を行うなど、構想マップづくりに向けて大きな弾みとなった。

4． 考察

現在までのWSの試みを通して､限界集落化が危惧される当該地域におけるWSの適用、筆者ら支援者の役割について考察してみたい。

まず、複数の WS を経験する中で、住民らが活発に話合いを展開することができた点は注目に値する。住民らの生き生きとした様子からは、自身の地域を「困っている限界集落」と認識することよりも、「地域資源をたくさん持っている誇れる地域」「仲間がいて明るく楽しい地域」といったポジティブな思考で捉えなおすところから取り組みを開始することが重要であると再認識させられた。集落支援員制度では、限界集落化の実態把握を含むチェックリストが例示されているが、それらを用いる場合には、地域に対する誇りや自信を取り戻す活動を展開しながら慎重に適用していく必要があるのではないかと考えられた。支援者としては、住民らの自立的な自然な活動を支えることを心掛けてきた。そのため、思惑通りに進んだ点、進まなかった点両面あるが、結果として住民らの生き生きとした様子を引き出すことができたと考えられる。

南牧村を事例とする WS の試みはまだ振興計画作りに及んではいない。しかし、住民らの様子から充分な手ごたえを得ることが出来たと判断され、引き続き振興支援の方策として適用を図っていくことが有効であると考えられる。その場合、人的資源の発掘、人々をつなぐ場の設定、ポジティブな思考を促す WS の企画運営に留意していくことが、これまでの適用結果から得られた要点であり、今後もこれらに留意しつつ適用を図っていく必要があるだろう。

---

[1] 例えば、手づくり自治区の創出を通して地域の夢プラン作りを行う「中山間地域集落ネットワーク形成支援事業」(山口県)がある。